

翻 訳

イヴァン・A・イリーン Иван А. Ильинь
『神と人間の具体性についての教説としてのヘーゲル哲学』
Философия Гегеля как учение о конкретности
Бога и человека
Москва, 1918

永 井 健 晴 訳

第2巻、人間についての教説 учение о человеке

第3部、人間の生（生活活動）の意味についての教説

Учение о смысле человеческой жизни

第13章 自由 Свобода（本号）137～182

第14章 人間 Человек

第15章 意思 Воля

第16章 法権利 Право

第17章 道徳（態） Мораль

第18章 習俗規範（態） Нравственность

第19章 人格（態）とその有徳性について О личности и её добродетели

第20章 国家について О госдарстве

第21章 人間の限界 Предел человека

第22章 結論 神義論の危機 Заключение. Кризис теодицеи

第13章 自由 Глава тринадцатая Свобода

〔パラグラフのはじめの【 】内の語句は訳者による。〕

【神的な〈自由（自己解放）〉の形象化—ヘーゲル哲学

изображение Божьей свободы (самосвобождения) — философия Гегеля】

ヘーゲルの哲学的教説は、全体として捉えるならば、〈神的な自由についての教説〉 *учение о Божьей свободе* として描出 *изобразить* されうる。なぜならば、かれが見ていたこと、そして、かれがそれを以て教えていたこと、これらすべては、実際に、こうした教説の内容に帰するからである。ヘーゲルの哲学は、神の〈本質〉 *сущность* を適切に開示 *раскрыть* することを試み、そして、この本質が〈自由〉 *свобода* に存する、ということを確認 *устанавливать* している。かれの哲学は、神の生（生活活動）の〈道程〉 *путь Божьей жизни* を描出することを試み、そして、この道程は〈自己解放〉 *самосвобождение* である、ということを究明 *обнаруживать* している。それは、〈人間の生（生活活動）〉 *человеческая жизнь* の意味 *смысл* を把握 *постигнуть* することに努め、そして、人間とその精神 *дух*、その身体 *дело*、その習俗規範（人倫）性 *нравственность*、その歴史、そしてその死——これらすべてが〈神の自己解放〉 *самоосвобождение Божия* の最高の段階を形づくる *образовать* ことを、強調 *утверждать* している。自由は最初にして最後のもの、帰結 *исход*、そして至上のもの *увенчание* である。自由は神性の本質 *essentiale* *Божества* であり、そして、実在性（現実性）の基準 *критерий* *реальность* である。一切は、〈自由を通じて *через*、そして、自由ゆえに *ради*〉存在する。ところで、自由の本性は何に存するのか？ *В чем же её (свободы) природа?*

【〈自由〉 = 〈自己限定〉：自己原因としての〈実体〉 = 神

свобода=самоопределение : субстанция как causa sui = Бог】

「自由」の定義において、そこに明確性 ясность や意見の一致 договорённость が些かでも欠けるならば、ヘーゲル哲学の信頼に足る理解にとっては致命的であるように思われる。「自由」という術語 термин は、思想史 история мысли において、しばしば用いられ、かつ濫用 злоупотреблять され、それには様々な意味 значие が結び付けられて、実際の論争において幾度もスローガン лозунг とされてきたので、その背後に隠れている〈合理的な内容〉 разумное содержание は、まるで姿を消して、その場所（本領）を、情緒的に体験される曖昧さ（非限定性） аффективно переживаемая неопределённость に委ねていたように思われる。ヘーゲルの時代に、すでにそうであった。かくして、この術語の積極的にして、合理的な内容 положительное, разумное содержание を再生 возродить させるためには、それについてのすべての直観力 сила интуитивного видения が必要となる。

神性の本質 сущность Божия は自由 свобода に存する。なぜならば、自由は〈自己限定〉 самоопределение であるからである。神は実体（基体） субстанция であり、唯一の実在（現実） реальность である。神の外になお他の実体が存在するのであれば、二つの実体の各々は一方の自らの存在によって他方の存在を〈制限〉 ограничивать し、〈限定〉 определять するであろう。これは、各々は他方によって限定され、それ自らによって実体的であるのではない、ということの意味する。なぜならば、実体は存在 бытие であるが、決して限定 определять も制約 обсловлять もされない存在であるからである。実体は実在 реальность であり、如何なる他在 инобытие も有さず、したがって全く自己に向けられて（依拠して）おり обращённая на себя、自己を自立的に限定している определяющая себя самостоятельно。〈求心的自己活動〉 центристремительная самодеятельность、〈自立性〉 самостоятельность、〈創造的一者〉 творческое одиночество——これは実体の基本的な標識である。ところで、こうしたことは、〈自由〉 свобода が実体の本質 сущность субстанции である、ということの意味 означать している。

【〈実体〉の無限定性・無終極性

беспредельность и бесконечность субстанции]

実体 субстанция は、第一に、〈消極（否定）的な〉意味 *отрицательный смысл* において、自由である。なぜならば、実体は何ものによっても決して境界 ограничить づけられていないし、限定 ограничить されてもいないからである。実体は終極 конец も境界 границы も有さないからである。それは一切 всё であり、一切において、アナクシマンドロス Анаксимандр の「無限定的なもの」»беспредельный» に類似しているからである。²⁾ 実体は「消極（否定）的な」無終極性»отрицательная« бесконечность を有 обладать しているのである。

【〈実体〉の創造性・活動性・能動性：〈実体〉 = 〈主体〉

творчество, деятельность, активность субстанции : субстанция = субъект]

実体は、第二に、〈積極（肯定）的な〉意味 *положительный смысл* において、自由である。なぜならば、それは〈創造的なもの〉 *творчество* だからである。それは、生（生活活動）*жизнь*、活動性 *деятельность*、能動性 *активность* であり、全く向自的である（自己に向けられている）*обращённая всецело на себя*。実体が創造 творить する、ということは、実体は何か「他なるもの」»иное» ではなく、そのものであるからである。実体はそれ自身主体 субъект であり、それ自身自己の客体 объект である。その「端緒」»начало» はその「終極」»конец» と一致する。実体は創造的で「積極（肯定）的な」無終極性»положительная« бесконечность である。

【創造的な自己限定 = 実体の自由：弁証法的な分解（脱統合）・有機的な再結合（再統合）

творческое самоопределение = свобода субстанции : диалектическое распадение- органическое воссоединение]

かくして、実体の自由は、実体は〈創造的な自己限定〉 *творческое самоопределение* である、という点に存する。こうした自己活動性

самодетельностьにおいて、全く向自的に、実体の自由は、自由に、〈内的な〉諸道程において на внутренних путях、そして〈内的な〉諸目的に従い по внутренним целям、自己の本質 сущность を現存化（実現）осуществлятьする。その（実体の自由の）道程は、それ（その自由な本質）を、〈弁証法的な分解（脱統合）〉 диалектическое распадение と〈有機的な再結合（再統合）〉 органическое воссоединение を通じて、一体化（接合）сраститьされた〈限定の具体的な豊饒性〉 конкретное богатство определений へと導く。こうした法則 закон に従い、そして、こうした形式 форма において、その（実体の自由の）〈理性的な〉本質 разумная сущность は現存化（実現）осуществлятьされる。

【〈実体〉 = 弁証法的・有機的に自己を思惟する客体（客観）的〈概念〉

субстанция = диалектически-органически мыслящее себя объективное Понятие]

実体 субстанция は〈理性（合理）的〉エレメント〔本領を発揮する境位〕 разумная стихия であり、〈思惟のエレメント〉 стихия мысли である。それは〈弁証法的・有機的に自己を思惟する客観的な「概念」〉 диалектически-органически мыслящее себя объективное Понятие である³⁾。その「概念」の活動の各々 каждый акт は、自由な自己限定の活動 акт свободного самоопределения であり、自由の活動である。「概念」 Понятие は、自由に自己の内容 содержание を分割 делить し、自由にそれを一体化（融合、接合）сращивать し、再び豊饒化 обогащать される。「概念」は、それ自身、思惟によって自己を創造する〈有意味な有機体〉 смысловой организм, сам себя творящий мыслью である。すなわち、この意味において、「概念」は、〈神的なもの〉 Божество であり、他在から自由な〈思惟の有機体〉 свободный от инобытия организм мысли、あるいは、〈自由な主体〉 свободный субъект であるのと同じく、〈客体（客観）的な意味〉 объективный смысл である⁴⁾。

【神の自由 = 内的な必然性・絶対的な有機体性

свобода Божия=внутренняя необходимость- абсолютная органичность】

勿論、自由は、神的な生（生活活動）の〈法則〉закон Божественной жизниとして、「概念」にとっては〈内的な必然性（不可避性）〉внутренняя необходимость для Понятияである。「概念」に固有なことПонятию свойственноは、絶対的な有機体の法則によって自己を展開すること развиваться по закону абсолютного организмаである。その絶対的有機体は、まさしく、それが〈他在инобытьеをまったく有 иметьしていない〉ということにおいて、相対的で有限の有機体から区別される。それゆえに、神の自由свобода Божияは、〈絶対的な有機体性〉абсолютная органичностьとして、適切に表現 выразитьされうる。

【他在の不在 небытие инобытия】

明らかに、すべての制限（限定）ограничениеや縮小（削減）уменьшениеは、実体を〈不自由な〉端緒（原理）несвободное началоへと変形 превращатьしてしまう。他在の現出 появление инобытияは、「概念」自身によって創出 саздатьされたにしても、それを制約された有限の立場 положение обусловленное и конечноеに置く。神の自由は如何なるものにも「対置 противопоставлятьされ⁵⁾」、「制約 обусловитьされ⁶⁾」、「制限（限定）ограничитьされ⁷⁾」えない。もしこんなことになれば、「概念」は自己の自由の〈絶対性〉абсолютностьと自己の有機的な展開の〈絶対性〉абсолютность своего органического развитияを喪失してしまう。これは、神性 Божествоが自己の自由を喪失 утратитьする、ということの意味している。

【「概念」の端緒における自由と不自由、主体と客体の緊張

натяжение между свободой (субъектом) и несвободой (объектом) в начале Понятия】

かくして、「概念」Понятиеは、「端緒の〈論理〉Логик начала」において、「絶対的理念」の状態 состояние «абсолютной Идеи»に到達（を獲得）достигнутьしてから、〈自己を不自由な状態〉の中に〈自由に解き放つ〉

свободно себя в несвободное состояние отпустить。これは、「概念」が自己の〈内的本性〉を〈全く〉歪める *искажать совсем* свою *внутреннюю природу*、ということの意味しない。そうではない。しかし、「概念」の存在の方式（能力）は根源において歪められる *способ его бытия в корне искажаться*。「概念」は自己の大気圏の純粋性と理性（合理）性を失う *чистоту и разумность своей атмосферы утрачивать*。「客（客観）的なもの」*«объективное»*は、黙認（許容されていること）を利用して *пользуясь попушением*、立ち上がり *восстать*、打ち勝ち *превозмогать*、危険をおかして生活活動を営みはじめ *начинать жить на свой страх*、自己存在の端緒（原理）を祝う *праздновать начало своей самобытности*。「主（主観）的なもの」*«субъективное»*は、弱く「内的に」揺らめきながら、諸事物の深奥にまで下降し *опускается до состояния слабого, «внутреннего» мерцания в глубине вещей*、そして、自己の自由な転落（落下）の諸帰結を、最後まで（とことん）受け取る *принимать до конца последствия своего свободного падения*。

【積極的自由の現存化による消極的自由の再建

восстановление отрицательной свободой через осуществление положительной свободой】

困難が生ずる затруднение возникает。一方からいえば、制限された自由 *ограниченная свобода* は自由では〈ない〉し、〈不自由な実体〉 *несвободная субстанция* は〈実体ではない〉。他方からいえば、実体は実体であることを停止 *перестать* しえ〈ない〉。したがって、〈制限された自由は、自由に留まらなければならない〉 *ограниченная свобода должна остаться свободой*。こうした困難は、「消極的 *отрицательная*」自由と「積極的 *положительная*」自由との間の差異によって解決される *разрешаться последствием различия*。「概念」は、第一の〔消極的な〕自由を喪失 *утратить* するが、しかし、第二の〔積極的な〕自由を保持 *сохранить* し、そして、〈第二の自由の開示（究明） *раскрытие* と現存化（実現） *осуществление* を通じて第一の自由を再建

восстановить すること) を自己の課題として立てる。このことの中に、全ヘーゲル哲学の簡潔なシェーマ схема всей философии Гегляは存する。

【「概念」の他在(被制限性)としての〈感覚的・具体的・経験的なもの〉
чувственное конкретное эмпирическое как *нобытие* (ограниченность) Понятия】

かくして、「概念」は消極的な自由を喪失する。「概念」の思弁的な無力 спекулятивное бессилиеは、「概念」は〈全てではない〉 *не все есть* こと、「概念」は〈他在〉と関係していること дело с *инобытие* иметь、このことをはっきり開示 обнаружить воочиюする。感覚的エレメントの生粋の保守性(因循姑息) подлинная косность чувственной стихии、非合理的な端緒の明確(非両義的)な反作用(抵抗) недвусмысленное противодействие иррационального начала、〈具体的・経験的なもの〉の特異(自己存在的)な支柱 самобытный упор конкретного-эмпирического——これらのことにおいて、「概念」は、「外なるもの」»внешнее»が「内なるもの」»внутреннее»を包含(表現・付与・具体化) облекатьするように、包含(具体化)された облёкшееその(「概念」)の他在 *инобытие* に、遭遇(邂逅) встретитьсяした。ここに、「概念」の被制限性(被限定性) ограниченность、有限性(終極性) конечность、被制約性(被規定性) обусловленность、被対置性(被対極性) противопоставленностьが由来する。

【「概念」の創造的自己限定(弁証法的・有機的な「思弁の変容」・自己豊饒化)の潜在力:有機体、魂、意識、意思、直観、思惟
потенциальное сила творческого самоопределения (диалектически-органической спекулятивной метаморфоза: самообгащения) Понятия: организм, душа, сознание, воля, созерцание, мысль】

しかしながら、「概念」は、積極的自由 положительную свободуを、すなわち、自己の前で上昇の展望を開いていく創造的な自己限定の力 силу творческого самоопределения, открывающую перед ним перспективу

восхожденияを、保持 *сохранить* していた。この力は、それが他在に拘束 *сковать* されているかぎりでは、世界の〈最低の〉諸段階における有機的生命に似かよったもの *подобие органической жизни на низших ступенях мира* の能力さえ有していない。しかし、この力は、自己において、隠された形姿 *в скрытом виде* において、自己のより高次の諸能力 *высшие способности* の全てを保持している。この力は、〈潜在的には〉 *в потенции*、有機体 *организм*、魂 *душа*、意識 *сознание*、意思 *воля*、直観 *созерцание*、そして思惟 *мысль* である。思弁的エレメントの潜在的な権能 *потенциальное могущество спекулятивной стихии* は、次の点において表現 *выражать* されている。すなわち、その力が、世界において *в мире*、自己豊饒化という自己の弁証法的・有機的な「思弁的変容」 *свою диалектически-органическую «спекулятивную метаморфозу» самообогащения* を、他在の負荷〈にもかかわらず〉 *несмотря на бремя инобытия*、持続 *продолжать* する——しかも、その思弁的エレメントが「敵」という非理性（非合理）的な自己存在性に *над неразумной самобытностью «врага»* 打ち勝つこと *возобладать* に成功するかぎりでは、そうする——という点において。まさにこの思弁的変容こそが、世界を、神性によって完遂された創造的な自己解放 *творческое самоосвобождение*、*совершаемое Божеством* へと、変える *превращать* のである。

【不自由の克服による自己解放

освобождение через преодоление несвободы】

こうしたこと全ては、次のことを意味している。すなわち、〈世界 *мире* において、実体 *субстанция* は自由ではないが、しかし自己を解放するための力を保持している *силу для того, чтобы освободить себя*〉、ということ。実体はこれ以外のことではありえない。というのは、実体 *субстанция* は〈精神的なもの〉 *духвна* であるが、精神 *дух* は「絶対的自由」 *абсолютная свобода* に他ならないからである。そして、実体が自己を制限（限定）され

た状態 ограниченное состояние に陥れる себя повергать とすれば、それはより高次の自己解放のため ради высшего самоосвобождения なのである。それゆえに、「世界における不自由」»несвобода в мире» は、極めて深遠なる神性の自由の顕現 проявление глубочайшей свободы Божества であるにすぎない。こうした自由は、「不自由な」状態を〈恐れることなく〉、*не страшится* こうした状態を〈受け入れ〉 *примлет*、そして、耐え抜き *изживает*、〈自己の自由のこうした深さを確証し〉 *утверждая этим глубину своей свободы*、それによって、〈自己解放のより高次の完成〉 *вышую полноту освобождения* を獲得 *приобретать* する。

【神における過程（審判）としての自由：生成する絶対的自由 = 喪失と回復（再獲得）

свобода как процесс в Боге : становящаяся абсолютная свобода = утрата и возвращение]

こうしたことは、次のように表現しうる。すなわち、〈自由は神における過程（審判） *процесс в Боге* である〉と。世界の各々の形姿 образ は、〈すでにして〉 *уже* 自由であり、そして〈全てはいまだなお自由ではない〉 *все ещё не свободен*。それはより低次の段階と比較して по сравнению より大きな自由であり、そしてより高次の段階と比較してより小さな自由なのである。世界の各々の形姿は、それぞれ静態として捉えられるならば、絶対的な自由を有さないが、世界の諸形姿の順列において в ряду мировых образов は、それぞれの形姿は〈生成しつつある〉 *становящаяся* 絶対的な自由である。世界の形姿化のあらゆる順列 весь ряд мировых образований は、自己の実体的な有意味性を再現（再建）する実体 субстанция, восстанавливающая свое субстанциальное значение によって創造 *создать* される。自由は、喪失され且つ再獲得された樂園 утраченный и возвращаемый рай であるかのごときものである。しかし、この樂園は、自由に、すなわち、純粹に内的な必然性（不可避性） чисто внутренняя необходимость によって、喪失され、そして、自

由な闘争に свободное же бореие おいて、すなわち、自己限定及び有機的成長の内的法則 внутренний закон самоопределения и органического роста によって、再獲得 возвращать される。

このようにして、〈活動現実性の諸形姿〉 образы действительности は全て、〈現象〉 явление については言うに及ばず、思弁的自由を〈欠いて〉 лишёны おり、自己解放 самоосвобождение のための概念の〈闘争〉 борьбу Понятия за самоосвобождение を、現している являть にすぎない。

**【解放された状態のステップによって限定される人間の生（生活活動）の意味
смысл человеческой жизни, определянный степенью освобожденности】**

こうして、〈人間の生（生活活動）の意味〉 смысл человеческой жизни は限定 определять される。人間の個々の状態は、それ自身から捉えられるならば、自らから多かれ少なかれ高次の「世界の形姿」を呈示する、活動現実性の欠片 ^{かけら} обломок действительности, представляющий из себя более или менее высокий « мировой образ » である。この形姿の高さは、それがそこにおいて明示 обнаруживать され、あるいは、むしろ、それを精神 дух が自己において且つ自己によって現存化（実現）する осуществлять（ところの）、〈解放された状態の程度（水準）によって〉 степенью освобожденности、限定 определять される。

**【〈いつもすでに〉現実化されつつある理想としての自由
свобода как всё ещё реализующися идеал】**

人間の生（生活活動）の意味は、自由及び自己解放に存する。勿論、生（生活活動）のこうした意味は、何らかの外的な課題 некое внешнее задание、あるいは規範 норму、あるいは実現不可能な理想 несуществимый идеал として、表象されるべきではない себе представлять следовать。自由を、たしかに理想と、しかし、すでに〈現実的な〉 реальный 理想と、〈いつもすでに現実化されつつある〉 всё ещё реализующийся 理想と、見なすこと рассматривать、こうしたことは可能である。自由は、〈潜在的に完全な力

потенциально-совершенная сила であり、自己の完全性の活動現実的な開花を創造する *творящая актуальное раскрытие своего совершенства*)。

【自己を解放する創造的力としての人間の本質（使命・宿命＝創造的闘争において自己を回復する実体（絶対的自由そのもの）

сущность человека как самоосвобождающаяся сила (назначение и предназначение = субстанции (само абсолютная свобода), восстанавливающая себя в творческом борении]

こうしたことは次のように表現しうる。すなわち、〈人間の生の意味〉は——〈自己の現存化（実現）に向けて労苦する現実的な精神的原理〉 *реальное духовное начало, работающее над своим осуществлением* がそうであるように——人間の精神の深奥の中に隠されている、と。人間に「課されている」こと「задано」、人間の使命 *назначение* 及び宿命 *предназначение* を構成していること——これは、人間に、その生粋の内的な本質 *сущность* ゆえに、「課され、人間に、その真実の精神的な本性 *природа* ゆえに、「宿命づけられている」*предназначено*。自己解放は人間に課されているが、しかし、それは、人間の〈本質〉が非自由 *несвобода* に落込んでいる、という意味 *значение* においてではなく、人間の現実的な本質 *реальная сущность* は自己を解放していく力 *самоосвобождающаяся сила* 以外ではない、という意味においてである。人間には絶対的な自由が「宿命づけられている」。そして、このことは、〈人間の生粋の精神的本質〉は、創造的な闘争において自己を回復する（取り戻す）*восстанавливающая себя в творческом борении*、〈実体そのもの〉、〈絶対的自由〉そのものである、というように理解すべきである。

【フィヒテにおける「絶対的自我」：人間の使命＝実体との創造的自己同一化（絶対的自由への上昇）：自己を思惟する概念の至上性、具体的豊饒性への弁証法的・有機的上昇：人間存在の存在論的根拠としての精神的自己解放
«абсолютный Я» в Фихте: назначение человека = творческое отождествление себя с субстанцией (восхождение к абсолютной

свободе); верховенство мыслящего себя понятия, диалектически-органическое восхождение к конкретному богатству, духовное самоосвобождение как онтологический корень человеческого существа]

まさにここで、ヘーゲルは、年長のフィヒテの教説の深み 深度から、理解されうるし、されなければならない。ヘーゲルによれば、人間において自己解放を創出する精神は、かの「絶対的自我」«абсолютный Я»に似ている。これは、フィヒテの教説によれば、自己の力によって、人間の「相対的な、弱い自我」に——「非我」«не-я»に対する、他在 *инобытие* に対する、勝利 *победу* を、保障する。人間の使命 *назначение* を、ヘーゲルはフィヒテとともに、自己の絶対的な精神的中心点 *свое абсолютное средоточие* (実体) との創造的自己同一化 *творческой отождествление себя* の中に、そして、絶対的自由への上昇 *восхождение* の中に、見ている。フィヒテは人間中心的な実体理解 *антропоцентрическое понимание субстанции* をすぐには棄てない。かれは自由について、無限に実現される理想 *бесконечно осуществляемый идеал* についてのように語る。かれは諸形象の全てを尽くすような思弁的系列 *исчерпывающий спекулятивный ряд образов* を知らない、すなわち、自己を思惟する概念の至上性 *верховенство мыслящего себя понятия* についての、そして具体的な豊饒性への弁証法的—有機的な上昇 *диалектически-органическое восхождение к конкретному богатству* についての、教説を知らない。しかし、フィヒテとヘーゲルは、人間存在の〈存在論的な根〉 *онтологический корень* を——〈精神的自己解放〉 *духовное самоосвобождение* として——同様に理解している。

【自己を自由に創造し有機的に確立する〈実体〉→絶対的自由の活動現実的存在 = 他在によって拘束されない客体的 (客観的) 〈意味〉 (〈概念〉) の〈生活活動〉

себя свободо творящая, органически утверждающая субстанция → актуальное бытие абсолютной свобода = жизнь не скованного

инойбытием объективного смысла (Нонятия)]

かくして、人間の生（生活活動）の意味は、ヘーゲルによれば、魂の固有の實在（現実）的な深淵の中に в собственной реальной глубине души 隠されている。自己を創造する〈当の〉ものは、実体、潜在的には、絶対的自由である То, что творит себя, есть субстанция, т.е. в потенции абсолютная свобода. 〈如何にして〉こうした実体が自己を創造するか как она творит себя、このことは、有機的な自己確立 органическое самоутверждение、すなわち、自由な創造 свободное творчество である。実体がそこに上昇する〈当の〉もの то, к чему она восходит は、絶対的自由の活動現実的な存在 актуальное бытие абсолютной свободы、すなわち、他在によって拘束されない客観（客体）的な〈意味〉（「概念」）の生（生活活動） жизнь не скованного инойбытием объективного смысла (Нонятия) である。そして、自己の自由を創造する実体 субстанция, творящая свою свободу は「概念」 Понятие 自身以外ではない、ということ を考慮するならば、〈「概念」は人間の生（生活活動）の意味である〉 Понятие есть смысл человеческой жизни、と言いうる。人間の最高の達成 высшее достижение человека は、人間の生（生活活動）の意味は、神的な（大文字の）「意味」の生（生活活動）を生き始める чтобы зажечь жизнью божественного Смысла、ということの中にある。そして、このことが達成されるならば、人間は、まさしく、この（大文字の）「意味」 Смысл は人間の現存化の意味 смысл его существование である、ということ を、確信 убеждаться する⁹⁾。

【人間存在の最高の目的としての人間の生活活動の創造的基礎：起動因 = 目的因：究極的理性 = 起動的端緒

творческая основа человеческого жизни как высшая цель человеческого бытия : causa efficiens = causa finalis : ultima ratio = primum movens】

人間は、人間の中で生きて（生活活動を営んで）いる〈もの〉の〈ために〉 для того, что в нем живёт 生きている（生活活動を営んでいる）。そし

て、人間は、〈そのために〉人間が生きて（生活活動を営んで）いる〈その力〉によって *того силою, для которой он живёт*、生きている（生活活動を営んでいる）。こうしたことは、次のことを意味している。すなわち、人間の生（生活活動）の創造的基礎 *творческая основа его жизни* は、それ自身、人間存在の最高の目的 *высшая цель человеческого бытия* である、ということ。あるいは、別の言い方をすれば、人間存在の目的は、〈それ自身〉、その生（生活活動）の中で自己を現存化（実現） *себя осуществлять* する、ということ。起動因 *causa efficiens* は目的因 *causa finalis* に符合 *совпадать* する。究極の理性 *ultima ratio* は起動の端緒 *primum movens* に他ならない。〈絶対的なものは、人間の魂と精神との過程において自己を解放する〉 *Абсолютное освобождает себя в процессе душевной и духовной жизни человека*。

この過程は諸ステップの全系列に向かって分解 *на целый ряд степеней распадается* し、概していえば *в общих чертах*、後続する図式を再生産 *следующую схему воспроизводить* する。

【内的なもの（主体）と外的なもの（客体）、〈即自〉と〈対自〉の間の相関～相互的な様態変容～〈即且つ対自存在〉—この相関を自覚する〈对我〉（我々にとって）—主体と客体（理性と自由）の思弁的な同一性

соотношение внутреннего и внешнего, самим по себе и самим для себя ~ взаимное видоизменения ~ само по себе и для себя — то соотношение означающее само для нас — спекулятивное тожество субъекта и объекта, разума и свободы】

「内的なもの」*»внутренние»* は、あたかも、それに無理矢理押し付けられたもの *ему навязанное*、外見からは *с виду* 「疎遠なもの」*»чуждое»* であるかのように、外から与えられた *извне данное*、何らかの「外的なもの」*что-то «внешнее»* に、つまり、何らかの「他在」*некое «инобытие»* に、遭遇する *наталкиваться*。この他在は、見たところ明らかな自立性 *самостоятельность*

を有し、そして、それに「突き当たった」内的な力 *»нашедшую»* ему внутреннюю силу を制限 *ограничивать* している。しかしながら、〈実のところ〉¹⁰⁾ на самом деле、この「他在」は、内的な解放する原理にまったく無縁ではなく *совсем не чудидо внутреннему, освобождающемуся началу*、自ら件の絶対的「理念」の〈客体的な変容〉 *объективное видоизменение* той абсолютной Идеи を提示 *представлять* するが、この絶対的「理念」に関しては、「内的なもの」*»внутреннее»*は、〈主体的な変容〉として現象する *субъективным видоизменением* является。客体的なもの *объективное* と主体的なもの *субъективное*、あるいは、同じことだが、「対象」*»предмет»*と「自己」*»самость»*、「現象」*»явление»*と「本質」*»сущность»*、「他のもの」*»другое»*と「主体」*»субъект»*、「外的なもの」と「内的なもの」¹¹⁾——これらは、対等の諸様態 *равноправные модусы* ではないにしても、一つの本質の諸様態 *единой сущности* である。しかしながら、「主体」は、いまだこのことを知らない。——客体についても知らないし、自己についても知らない。客体は、同様に、このことを知らない。——自己についても知らないし、主体についても知らない。したがって、客体の真（生粋）の性質 *истинная природа объекта* は、依然として〈隠されて〉 *скрытой* いる。その理性（合理）的根拠 *разумный корень* は自己自身によって自覚（認識） *ознавать* されない。客体は、「即自的に」*»сам по себе»* (*nur an sich*) のみ理性的 *разумен* であるにすぎず、¹²⁾ 「対自的には」*»для себя»* (*für sich*) 理性的ではない。客体は、自己固有の非理性に囚われているかのように *как бы в плену собственного неразумия,苦悶している томиться*。客体に遭遇する「主体」も、同じく、思い違い（誤解） *заблуждение* の中に佇立している。しかし、「主体」と「客体」について哲学 *философствовать* している「我々」*»мы»*は、諸事物の真（生粋）の状態 *истинное положение дел* を知り、そして、錯誤（欺瞞）の中に深入りしない *не вдаться в обман*。「我々にとって」*»для нас»*（即自的ないし〈我々にとって〉 *an sich oder für uns*)¹³⁾、客体は、他在の外

見の背後に за видимость инобытия 自己の隠された「客体(客観)的」理性 свою скрывают «объективную разумность» を保持 сохранять している。かくして、「解放」»освобождение»は、次の点に存する。すなわち、この我々にはそのように見られる(明白な) 真実 истина は、暴露(明らかに) разоблачить されざるをえない、という点に。「即自的に」現存するもの то, что обстоит «само по себе»は、現存することにならざるをえないし должно стать обстоящим、しかも、「対自的に(独力で)」»для себя»。かくして、諸事物の真(生粋)の本質 истинная сущность вещей は、主体によって〈知られる〉 осознанной субъектом——〈主体によって適切に認識される〉 адекватно им познанной——ことが明らかになろう。「即自的に現存するもの」は、「対自的に(独力で) 現存するもの」になり、出口 выход は、最終的領域へと в последнюю сферу、「即かつ対自的に現存するもの」の領域へと в сферу »сушую по себе и для себя»、〈主体と客体との、理性と自由との、思弁的な同一性〉の領域へと в сферу спекулятивного тождества субъекта и объекта, разума и свободы、開かれるであろう。主体と客体とのこの接近 сближение между субъектом и объектом は、完全な明確性 отчетливость を伴って、表象 себе представить されなければならない。というのは、そこ(その接近)に解放の本質 сущность освобождения が存するからである。

**【客体(他在)の仮象性(虚偽性)の暴露—客体(他在)の取得・同化
разоблачение мнимости (видимости) объекта (инобытия)—усвоение
объекта (инобытия)】**

自己を「解放すること」»освободить» себя は、次のことを意味している。すなわち、自己の存在の諸条件 условия своего бытия を——それら(諸条件)から〈すべての他在が消失する〉 чтобы из них исчезло всякое инобытие ように——〈更新すること〉 обновить を、意味している。しかしながら、全ての「他なるもの」の「消失」»исчезновение» всего «иного»は、闇雲の否定の道程においても на пути ослеплённого отрицания、跡形のない廃絶の道

程においても на пути бесследного уничтожения、達成されない
 недостижимо。¹⁴⁾ 解放 освобождениеは、次のようにのみ理解される мыслимо。
 すなわち、他在は〈他在のように受け取られ〉 *приемлетя как мнимое*、それ
 から、〈我がものとされ〉 *усваивается*、そして、最後には、〈虚偽（仮想）
 の〉 他在として暴露される как мниное инобытие *разоблачается*、というよ
 うにしてのみ理解される。理性は客体の非理性的な仮象に勝利（を克服）す
 る。Разум побеждает неразумную видимость объекта.

【客体（他在）の主体との媒介された一体性

опосредствованное единство объекта (инобытия) с субъектом】

かくして、主体は、他在を、否認（拒否）する（退ける）こと отречься
 отも、強制すること насиловатьもなく、「受け入れる」» *примлет*
 (принимает)¹⁵⁾。主体は他在を、主体がそれを「発見」» *находить*»し、あるいは
 「受け取る」» *получать*» ところの同じ外観（アспект） видにおいて、把
 捉 братьするが、しかし、それ（他在）を把捉するのは、それ（他在）を自
 己自身に「対置するため」» *чтобы противопоставить*»であり、そうして、「それ
 （他在）を自己との媒介された一体性へと齎す」» *свести его к*
опосредствованному единству с собою»¹⁶⁾ ためである。かくして、「魂」
 » *душа*»は、自己の「身体」» *тело*、「外的諸事物」» *внешние вещи*、自己固
 有の無意識的な「諸々の愛着（意欲、渴望）」» *свои собственные бессознательные*
«влечения»、「他の人びとの存在」» *бытие других людей*、「経済（家政）」
 » *хозяйство*、等々を受け入れる。魂は、これら全てを、（上昇 восхождение
 のさまざまな諸段階で、「順番に」» *по очереди*） 制限（限定）する何らか
 の疎遠なもの нечто чуждоеограничивающееとして、「限界（運命）」
 » *предел*»¹⁷⁾として、自己に対立 себе противопоставлятьさせ、そして、こうし
 た限界（運命）との、克服のための闘争に入る в борьбу ради преодоления
 всуспать。¹⁸⁾

【主体による対象的内容の理念化：主体の「契機」としての内容

идеализирование предметного содержания через субъект : соержание в качестве «момента»】

主体は客体が自己の領域の中に入ることを甘受する。主体は自己を〈あたかも〉受動的状態に置く〈かの如く〉して、自己を制限ограничитьし、限定определитьすることを〈許容〉*позволять*し、影響（感化）に堪える воздействие терпеть。かくすることで、主体は自己の中に客体の内容 содержание объектаを導き入れ、それを作動вращиватьせしめ、それを自己の中に吸収вбирать¹⁹⁾し、それを同化усваиватьする²⁰⁾。主体は、主体に与えられた対象（物体）体的な内容 данное ему предметное содержаниеを、自己の「理念的な本性の」柔軟かつ強力な言語гибкий и могучий язык своей «идеальной природы»へと翻訳переводитьする（転化させる）。主体はその対象的な内容を「理念化」»идеализировать»²¹⁾する。すなわち、その内容の特異な（自存する）現実（実在）性самобытную реальность²³⁾を否認（否定）отрицать²²⁾する。その力と豊饒мощь и богатствоとをより高い段階で保持сохранить²⁴⁾するために。こうしたことのおかげで、主体はその内容を意のままに овладетьし（に習熟し²⁵⁾、その内容をして、「契機」として в качестве «момента」、自己に従属せしめる себе подчинять²⁶⁾。

【客体を〈道具〉として占有、所有、消費する主体：精神の生活活動に貫かれる客体：〈我〉と〈汝〉としての主体と客体

объект как инструмент завладевающий, обладающий, потребляющий субъект : объект, проникающийся жизнью духа : субъект и объект как «я» и «ты»】

こうした客体の受容（感受）приятие объектаと自己の中への客体の導入 введениеに、対象（物体）の中への主体の創造的浸透творческое проникновение субъектаは合致соответствоватьしている。精神は、「身体」、「外的諸事物」、「経済（家政）」、等々の内容によってのみ、豊饒化обогащатьされるのではない。それ自身、現実²⁷⁾に сам реально、それらに向かって（取

り掛かり) обращаться к ним、それらの現存 существованиеを變容 преобразовать²⁷⁾させる。主体は〈客体自身〉²⁸⁾を占有 *самим объектом* завладевать し、客体を自己の所有物 *собственность*²⁹⁾とし、客体を消費 *потреблять*³⁰⁾する。主体は客体を力づくに征服 *осиливать* し、客体を自己へと飼い馴らし *себе покорять*³¹⁾、そして、客体をして、〈自己の〉影響に堪える *свое влияние терпеть* ことを、〈自己の〉支配を負うこと *свою власть нести* を、強いる *заставлять*³²⁾。それだけでなく *мало того*、精神 *дух* は、客体を自己の「言いなりになる適用される武器」*»податливое и приспособленное орудие»*³³⁾へと、自己の「道具」*»инструмент»*³⁴⁾へと、変える *превращать*。精神がこうしたことを達成 *добиваться* するのは、客体が精神のために「完全に通行（貫通）可能で」*»вполне проходимым»*、「流動的な」*»текучим»*³⁶⁾ものとなるためであり、客体が精神の自由な飛翔に対して抵抗³⁷⁾を示さない *не оказывать сопротивления* его *свободному полету* ためである。すなわち、客体が、精神の生（生活活動）によって、貫かれる³⁸⁾ためである。結局のところ、精神は、客体を、自己の「誠実な表現」*»верное выражение»*³⁹⁾へと、自己の「直接性」へと、変える⁴⁰⁾。その時、客体は克服されたものとして現れ、そして主体は、次のように述べる確固たる根拠 *полное основание* を受け取る。「汝 *ты* は我 *я* であり、我は汝である」と。あるいは「汝と我は同一のもの *одно и то же* である」と。客体は正体が明かされる *оказываться разоблаченным* が、主体は「他在」から自由 *свободным от «инобытия»* である。しかしながら、まさにこの自由のおかげで、主体は、新たに客体を他在へと「解放」*»опустить»* する、そして、客体に自己の「外的な」現存を先導させる *предасаивить ему вести свое «внешнее» существование*、そうした可能性を、有することになる⁴¹⁾。もはや、「他在」は精神を脅かすものではない *не сташно духу*。すくなくとも *по крайней мере*、精神が克服 *побороть* した他在の多様性 *разновидность* において。精神は明らかに「外的な」影響の危険に対して「鍛えられたもの」*»закаленным»* против *опасности «внешнего» воздействия* となっている。精

神は自己を対象（物体）の主人 господином として感じて、自己をそれ（対象）との「冷静な」関係 »безразличное« отношение の中に置いている⁴³⁾。精神は、もはや、それ（対象、物体）に釘づけにされ（隷属化され）ても прикреплен к нему⁴⁴⁾、それに占有されても занятым⁴⁵⁾、それに関心を向けても заинтересован им いない。というのは、対象（物体）はその従順な状態 покорное состояние へと変化 превратиться したからである。客体は主体を制限 ограничивать してもいないし、それを限定 определять してもいない。主体は、もはや、受動的ではないし、依存性 зависимость を知ることもない⁴⁶⁾。精神は、他在の形式 форм инобытия に留まりながら оставаясь、自己の自由を保持 соблюдать し、自己の内的な法則を遵守 своему внутреннему закону следовать している。精神は、客体において自己に邂逅 найти し、自己において客体を定立 (setzen) положить した。精神は、自己が他在で被われた状態 облеченность を保持 сохранить しうるが、しかしまた、他在によって征服された、存在の非合理的な諸根拠から、離脱 от побежденных им, иррациональных корней бытия оторваться しうる⁴⁷⁾。というのは、精神は、それらの上に自己の力 力を確立 утвердить し、それらから解放 освободить されたからである。

【精神と他在との同一性～実体的原理（本質）と一致する偶有性（現象）

тожество духа и инобытия ~ «акциденция» (сущность), согласованная с субстанциальным началом (явлением)】

かくして、精神の自由は、次の点に存する。すなわち、精神は客体との関係において自己に〈実体⁵³⁾〉の意味及び力を付与 себе значение и силу сущности придать する、という点に。精神は、他在との「同一性」»тождество« に入ったが⁵⁴⁾、しかし、この同一性を、実体的な原理と調和（一致）した自己の「偶有性」свою «акциденцию», согласованную с субстанциальным началом に変えた превратить⁵⁵⁾。主体は本質存在 сущность となったが、しかし、客体は、この本質存在の適切な現象 адекватным явлением этой сущность となった。精神の自由は、次の点において表現 выражать され

る。すなわち、精神は、他在の諸制限から離れずに не выходя из пределов инобытия、それらから逸れつづけている пребывать в «отвлечении» от него、⁵⁷⁾すなわち、外的な活動を必要としないで ненуждаясь во внешней деятельности、⁵⁸⁾自己の〈内的な〉生(生活活動)を創出 свою внутреннюю жизнь творить し、⁵⁹⁾そして、自立して самостоткльно 自己自身の法則を遵守する своему собственному закону следовать、そういう可能性 возможность を有している、⁶⁰⁾という点において。

【精神の自己への自由な反省的帰還：内的他在（感覚、情動、激情）との精神の闘争＝内的自己解放の過程＝内容の受容と内容への浸透＝内容の変容＝内容の自己発現（自己限定、自己所有）～精神の自己同一性＝自己の〈意味〉（「概念」）の現存化による「即且つ対自存在」（絶対的自己限定・完全な自己認識）の希求

свободная рефлексия духа на себя： борьба духа с внутренним инобытием（ощущение, чувство, аффект, страсть）～ приятие соерждения, проникновение в соерждение = преобразование соерждения = самообнаружение（самоопределение, самообладание） соерждения ～ тожество с самим собою = быть у себя（по себе） и для себя（абсолютное самоопределение, совершенное самосознание） через осуществление самоназначения（«понятия»）】

こうした解放状態 состояние освобожденность は、もちろん、次のことに導かれる。すなわち、主体は、もはや客体にはなく、〈自己自身〉に向けられる、ということに⁶¹⁾。あたかも、主体は、他在への遠征 похода в инобытие から帰還し、⁶²⁾その後、勝利者 победитель として凱旋するかのよう。しかしながら、こうした自己への自由な反省的復帰 рефлексия において、⁶³⁾精神は、今度は新たに、自己固有の諸限界 пределы において、一定の受動性 пассивность、直接性（無媒介性） непосредственность、そして、被制限性 ограниченность を、すなわち、一定の「他在」 »инобытие» を、開示 открывать

する。自己自身において、全てが自己に「属 принадлежитьして」いる、全てが自己に服している покорно、全てが自己と同一 тождественноである、全てが自己の標識 знакである、というわけではない、すなわち、自己限定（自己規定）самоопределениеはいまだ「絶対的」ではなく、精神自身は完全には自由ではない、ということが明らかになる。かくして、〈内的な〉自己解放 внутреннее самосвобождениеの、〈内的他存在〉внутреннее инобытиеとの——受動的な感覚 пассивное ощущение、感覚的な愛着（憧憬、渴望）чувственное влечение、興奮（錯乱状態）аффект、激情 страстьとの——闘争 борьбаの過程が始まる。主体は、全ての直接性（無媒介性）непосредственность〔という身に着けている衣〕を「剥ぎ取り снять」⁶⁴⁾、いまここに臨在 иметьсяしている内容 содержаниеのそれぞれに対する支配力 властьを獲得 приобрестиしなければならない⁶⁵⁾。この支配力は、以前と同じく、二重化 удвоитьされた過程によって獲得される приобретаться。一面では、所与の内容を自己の中に受容（知覚、感受）すること приятиеによって（を媒介して）、そして、その内容を認識（自覚）сознаниеすることによって⁶⁶⁾。他面では、その内容の中に創造的に浸透すること творческое проникновениеによって、そして、それ（内容）を変容（形態変化）させること преобразованиеによって⁶⁷⁾。こうした二重の「自己成就」двойное «вживание»の帰結として、「内容の存在」において自己顕在化（自己発現）した内容 содержание, обнаружившееся в «его бытии»は、〈その主体の〉内容となる。その内容は主体の真正の所有物 подлинное достояниеへと変容 превращатьсяする。精神は、内容に重圧をかけていた（を苦しめていた）「疎遠なもの」や「外的なもの」といった外見 видимость «чуждого» и «внешнего»を引き剥がし、その内容を〈内的な〉諸限定の系列 ряд внутренних определенийの中へと導き入れる。こうしたことは、次のことを意味する。すなわち、精神は内容を自己の中へ、そして、自己を内容の中に根づかせる（定着させる）внедрять、ということ、あるいは、同じことであるが、精神は自己の内へと退き внутрь

себя уходить、自己自身を——自己の中へ根づかせる сам себя в себя вдрять (sich er-innern, 想起 (内化) する)、ということ⁶⁹⁾を。この運動において、精神は、漸次、自己を占領 (支配) овладевать し、〈自己所有〉を達成する самообладания достигать⁷⁰⁾。精神は自己に対して支配力 власть を獲得 приобретать⁷¹⁾ し、そして〈自己自身との同一性〉 тождество с самим собою の中に踏み入る вступать⁷²⁾。自己の意味 (目的) назначение を、あるいは、ヘーゲルが、通常、表現しているように、自己の「概念」»понятие»を、現存化 (実現) осуществлять して、精神は、自己の達成を支配すること владыкой своего достояния быть を、「自己において (即自的)»⁷³⁾ かつ「自己に対して (対自的)»⁷⁴⁾ に在ること»у себя» и «для себя» быть を、希求 стремиться する。「自己において (即自的に) 存在すること」は「自由である (に存在すること) を意味している»Быть у себя значит быть свободным»⁷⁵⁾。そして、「精神の本質存在」»сущность духа»は、すなわち、「自己において (即自的に) 存在しようとする、という点に存する»⁷⁶⁾。このことが意味しているのは、主体は「もっぱら自己と、そして自己の」限定 определение と、係らなければならない должен дело с ... иметь、ということである⁷⁷⁾。精神に相応しいのは、絶対的な自己限定 абсолютное самоопределение であり、そして完全な自己認識 совершенное самосознание である⁷⁸⁾、ということである。これはまた、「自己において (即自的に)» かつ「自己に対して (対自的に)» ある、ということ⁷⁹⁾を、あるいは、同じことであるが、「自己自身に関係する理念性である»»быть идеальностью, относящеюся к самрй себе»⁸⁰⁾、ということである。

【精神による内容の領有と支配 = 他在と精神との間の差異の除去 : 思惟する主体の理性的な客体の中への浸透 : 思弁的思惟活動 = 理性的認識 : 理性の外の自由の不可能性

присвоение и владение содержания через дух : снятие разлития между инобытием и духу : проникновение мыслящего субъекта в разумный объект : спекулятивное мышление = разумное познание : свобода

невозможна вне разума]

こうしたことが達成、достигнуть されるとき、精神は自由である。したがって、自由は次のことを前提としている。すなわち、主体が自己の内容を「うまく処理し（遣りこなし）справиться⁸¹⁾、「領有」»присвоение»と「支配（制御）」»владение»をとことん遣り逃げ（最後まで現存化し）до конца осуществить⁸²⁾、他在の暴露、разоблачение инобытияを済ませ⁸³⁾、他在を研究し尽くし проработать⁸⁴⁾、他在と自己（精神）との間の「差異」»различие⁸⁵⁾を取り除き（剥ぎ取り）снять、「他在」を自己の標識⁸⁶⁾と再現（形象、反映）знак и отображениеへ変えて превратить いた、ということ。そのとき、精神は、自己に由来し〈ない〉もの всё, что идёт нет от него 全てを根絶 искоренить して、他在とのあらゆる「関係」»отношение»から、そして、あらゆる被限定（制限）態 ограниченность⁸⁹⁾から、自己を解放 освободить⁹⁰⁾する。精神は、それに従って、主体が客体と〈対立 противостоятъ する〉か、あるいは客体からの〈離反 отвлечение〉（の度外視、抽象）でありつづける、そういう知識の間違った（あやふやな）前提 неверную предпосылку знания を「取り除く（剥ぎ取る）」⁹¹⁾。現実には реально、思惟する「主体」が理性（合理）的な客体の中に浸透すること проникновение мыслящего «субъекта» в разумный «объект»が、そして、その逆のことが、実現（現存化）する осуществлять、ということによって、精神は、そうした前提を論駁する⁹²⁾。勿論、こうした浸透は、思弁的な思惟活動 спекулятивное мышление においてのみ、あるいは「理性（合理）的な認識」»разумное познание においてのみ、可能である。それゆえに、〈自由は理性の外では不可能である〉 поэтому свобода невозможно вне разума。

【理性的思惟活動を通じての主体と客体の同一性（邂逅・融合）：同一性と差異性の同一性 = 〈主体〉 = 〈実体（理性・精神・思惟）〉 = 〈自由（自己認識）

тожество (схождение, сращение) субъекта и объекта через мышление :

тождество тождества и различия = субъект = субстанция (разум-дух-мысль)
= свобода (самопознание)]

「主体」と「客体」の同一性 тождество «субъекта» и «объекта»は、すなわち、〔それらの〕偉大なる邂逅（合致）схождениеと融合 сращениеは、理性的な思惟活動においてのみ、実現される осуществляться。理性 разумが自由であるのは、理性は〈全て（万物）〉 всёを「自己」⁹³⁾固有の様態変化（変態、バリエーション）«свое» собственное видоизменениеとして認識 познатьするからである。理性が自由であるのは、理性は「自己を、他のものにおいて、自己自身として」知り（理解し）、знатьかつ観照（直観） созерцатьするからである。⁹⁴⁾理性は差異性 различиеにおいても、自己同一性 тождество с собоюを保持 сохранятьし、そして此の自己同一性において、理性の無限性 бесконечностьと永遠性 вечностьを保持する。⁹⁵⁾主体が自己の本質（理性）сущность（разум）として認識 познатьするのとまさに同じものを、主体は客体の本質として承認（認定） утверждатьする。⁹⁶⁾主体がどこに浸透 проникнутьしたとしても、主体は、いたるところで、次のことを確信 убеждатьсяしている。すなわち、客体は、その中に主体自身が在りつづけている пребывать、精神と理性のその体系の、構成要因 член той системы духа и разумаである、ということ。⁹⁷⁾主体は、いたるところで、自己と一体化（融合） с собою сливаться⁹⁸⁾し、そのことに主体の自由が存する。精神は対象 предметを認識 знатьしながら、そのこと自身によって、〈自己〉を〈対象〉において себя в предмете 認識する。客体を意識すること сознавать объектは、精神にとっては、自己を意識することを意味 значитьする。このことに、自己自身との精神の和解（宥和） примирение⁹⁹⁾と自由とが存する。¹⁰⁰⁾主体が対象において探り当てискать、発見 находитьしているのは、自己に他ならない。¹⁰¹⁾というのは、思惟 мысльの全ての内容は、思惟自身であるからである。¹⁰²⁾思惟活動 мышлениеにおいて、客体は完全に主体として生ずる（創出される）создаться。¹⁰³⁾そして、それゆえに、思惟活動は自由の原理 начало свободы

なのである。対象の認識 *познание предмета* は、すでにして、他在との遭遇 *встреч с инобытием* ではなく、真実の自己認識 *самопознание истины* である。人間がこのことを理解（究明）*постигнуть* したならば、かれは「自由な精神」*«свободный дух»* である¹⁰⁴⁾。そのとき、人間は主体と客体の同一性について知り *знать*¹⁰⁵⁾、そして、「自発的に活動する思惟の生粋のエレメント」*«чистый элемент самодеятельного мышления»* に在り続けている *пребывать*¹⁰⁶⁾ のである。こうしたことを通じてのみ、「完全な自由」*«полная свобода»* は実現される *осуществляться* ことになる¹⁰⁷⁾。

【精神の〈自由〉＝絶対的自己限定の自己認識：主体と客体の理性的同一性を認識する精神：人々の生活活動において活動現実性を獲得する〈理念〉として現象する自由な精神

свобода духа = самопознание абсолютного самопределения : дух, знающий разумнее тожество субъектом и объектом : свободный дух, являющийся идеєю, принявшего действительность в жизни людей】

かくして、精神が自由であるのは、〈精神が、精神は絶対的な自己限定である、ということを知っている〉とき *когда он знает, что он есть абсолютное самоопределение* である。そのとき、精神は〈神聖〉*свят* である。神聖なるものは、それ自身「理性的なもの *разумно* であり、理性的なるものについて知っているもの」であるからである¹⁰⁸⁾。そのとき、精神は自己について全ての内容を認定 *полагать* しており、そして、それを自己の諸々の深奥から自立的に展開することで *развивая его самостоятельно из своих недр*、自己を創出する。精神は、〈その周りには何も無い〉*кроме него ничего нет*¹⁰⁹⁾ ということを知っているし、自由は精神に固有な本質 *его собственная сущность* である、ということを知っている。そのとき、精神は、神的な自己目的として *божественной самоцелью*¹¹⁰⁾、人びとの生（生活活動）において活動現実性を獲得した〈理念〉として *идеєю, принявшего действительность в жизни людей*、現れる *являться*¹¹¹⁾。というのは、理念 *Идея* は、人びとが自由¹¹²⁾

を、自己の本質として、自己の目的 *цель* かつ自己の対象 *предмет* として、¹¹³⁾ 知っている、という点に存するからである。

【神的自由・哲学的思惟活動の二系列——①感覚的なエレメント（非理性的なもの）からの絶対的解放、②〈活動現実的世界〉における〈非理性的なもの〉の抵抗の「概念」（哲学的思惟活動）による克服

двое ряды Божей свободы (философского мышления)—1. абсолютное освобождение от чувственной стихии (иррациональном), 2. преодоление такой сопротивлениия иррационального в действительном мире через «понятие» (философское мышление)】

こうしたことは、〈活動現実的な世界〉において「概念」によって完遂されつつある自己解放の道程 *пусть самоосвобождения, совершаемый Понятием в действительном мире* である。しかしながら、勿論、「本質存在」と「実存（現存態）」とが混成されたこうした世界と並んで *наряду с этим миром, смешанным из «сущности» и «существования»*、神的な生（生活活動）*жизнь Божия* は、途切れることなく *непрерывно* 〈哲学的な思惟活動〉の最高の〈絶対的な水準〉に向けて *и на самом высоком, абсолютном уровне философского мышления*、流れてゆく *протекать*。世界において最初の〈理性的な認識〉 *разумное познание* が成立 *состояться* したときから、〈絶対的な自由〉 *абсолютная свобода* は、「客観的な認識」のエレメント *элемент «объективного сознания»* において復帰 *восстановиться* していた。そのときから、思惟 *мысль* は、その純粋な意義 *исчинное значение* において、いつも、減少（低下）*уменьшение* されないままにとどまっている *неумалённою* оставаться。それゆえに、神的な自由 *Божью свободу* を、〈一度に二つの系列において〉 *сразу в двух рядах* 観照（直観）*созерцать* しなければならない。神的な自由は、哲学的な思惟活動においては〈絶対的〉であるが¹¹⁴⁾、そこでは、「概念」*Понятие* は、厭うべき伴侶から *от однозного спутника*——〔すなわち〕感覚的エレメント〔自然力〕*чувственной стихии* から——まったく解放された

освободилось。そして、同時に、神的な自由は、活動現実的な世界において <制限 *ограничить* されている>。そこでは、「概念」は、非理性（合理）的なものの抵抗 *сопротивление* を克服 *преодолевать* しなければならなくなり、そして、せいぜいのところ *в лучшем случае*、その「概念」の限定された言語で自己を表現 *себя на его ограниченном языке выражать* しなければならなくなる。

【〈神〉・〈人間〉—〈自己意識〉=〈自由な精神〉～絶対的自己限定

«Бог»-«человек» — *самосознание* = *свободный Дух* ~ *абсолютное самоопределение*】

主体的な意識（自覚）の思弁的な〈吸収〉 *спекулятивное поглощение* субъективного сознания だけが、客観（客体）的な思惟によって、「精神」に、その絶対的な自由と無限性 *бесконечность* を、返還 *возвращать* する。しかし、このことは、思弁的・哲学的な思惟活動 *спекулятивно-философское мышление* においてのみ可能である。「神は精神である」*»Бог есть Дух* ということは、「神は、神が自己自身を知るかぎりでのみ、神である」*»Бог есть Бог лишь постольку, поскольку он сам себя знает*¹¹⁵⁾ ということを、意味している。しかし、神によって実現（現存化）される、〈自己を知る〉 *знание себя*、*осуществленное Богом*、ということ、*「人間におけるかれ（神・人間）の自己意識」»его самосознание в человеке*」であり、したがって、人間が〈神〉について知ること *знание человека о Боге*¹¹⁶⁾ は、人間が〈神〉において自己を知ること *знание человеком себя в Боге* に、そしてさらには、〈神が人間において自己を知ること〉 *знание Богом себя в человеке* に、*帰着* *восходить* する。このことは、次のことを意味する。すなわち、神は、〈哲学的な自己認識〉 *философское самопознание*¹¹⁷⁾ においてのみ「生粋の神」*»истинный Бог*」であり、ここでは、神はまさしく *воистину* 「自由な精神」*»свободный Дух*¹¹⁸⁾ である、ということ。他の諸段階においては、とりわけ、神がまだ限定されない非媒介性（直接性）の *элемент элемент неопределенной*

непосредственно к ней относясь, сохраняя, 自然 природаにおいては、神は「生粋の神」ではないのである。神として名づけるべきものは、「生粋に生粋なるもの（真実に真実なるもの） истинно-истинное、すなわち、「そこでは自由な「概念」 Понятиеがもはや自己の客体性において в своей объективности 解決されていない 対立性 неразрешённой противоположностью を有さないところ、すなわち、そこではそれ（その自由な「概念」）が如何なる形でも有限なものに 関与（関係）させられない не причастно конечному¹²⁰⁾」、そして、この関与（関係）に制限されない не ограничено этого причастностью ところ、こうしたところのものだけなのである。

【精神の自己解放 = 主体と客体の内への精神の自己深化

самоосвобождение духа = самоуглубление духа в субъект и объект】

自己解放の過程全体 весь процесс самоосвобождения は、精神の独自の〈深化〉 своеобразное углубление духа として性格づけられる。精神は、「客体」の中へと、そして同時に、「自己」の中へと、自己深化 углубляться する。客体の中への精神の深化は、精神の生粋の〈自己深化〉が存立 состояться しようするためには、不可避である。主体を客体の中に齎す各々の歩みは、精神の自己解放という事態を漸進させる подвигать。しかしながら、これらの二つの運動 движение は、区別 различить も区分 разделить もされず、おのずから一つと同じ運動を表示（呈示）している представлять。勸所は次の点にある。すなわち、客体における新たな征服 завоевание の各々は、客体を完全に絶滅する уничтожать のではなく、「他在」や「客体性」の新たな〈より洗練された〉姿（アスペクト） более утончённый вид «инобытия» и «объективность» を開被 раскрывать し、その客体性の克服 преодоление は、〈より洗練された〉そして〈より深化された主体的な活動〉 более утончённой и углублённой субъективной деятельности によってのみ〈達成される〉 доступно、という点にある。「情動（触発）」 «аффект» あるいは「表象（知覚の再現）」 «представление» を支配 овладеть するために、主体は精神性

духовность のより高次の段階へ上昇 подняться しなければならない、あるいは同じことだが、その上で、主体が、「外的な諸事物」»внешние веща»に、あるいは、固有の身体 собственное тело（例えば、歩行時における во время ходьбы）に、係るところのもの、これらより、より深い内的な創造性 внутренее творчество の段階へ下降しなければならない。こうしたことは、次のことを意味する。すなわち、客体の中への主体の深化 углубление субъекта в объект は、自己の中への主体の不断の平行した深化 углубление его в себя を要求 требовать する、ということ。対象に対する新たな勝利 победа над предметом の各々から、主体は、成熟化 вырасти され、深化 углубить されたものとして、精神化 одухотворить され、解放 освободить されたものとして、帰還 возвращаться する。主体は、対象の本質 сущность предмета（「客体（客観）的」理性 »объективный» разум）へ接近 приблизиться し、そして、この接近 приближение において、独力で（対自的に） для себя、主体固有の本質 его собственная сущность（「主体的」理性 »субъективный разум»）により近い、生（生活活動）の新たな形式 форма を、研ぎ澄ました выточить。そして、その時々、主体は〈自己〉を征服された他在 побеждённое инобытие から〈切り離し〉 отрываться、〈それ（他在）を放免し〉 его на волю отпускать、そして、新たな〈対象の内容〉 предметное содержание と新たな〈精神的存在の様式〉 способ духовного бытия にとよって豊饒化 обогатить されて、〈自己へと帰還する〉 к себе возвращаться。より洗練 утончить された新たな対象の各々は、主体を新たな——自己のものに（自己化） усвоить された客体に対する、そして、以前の、より媒介されていない（直接的な）、自己の生の様式 прежний, более непосредственный способ своей жизни に対する——〈二重の〉勝利 двойная победа へと導く приводить。〈客体〉は固有の〈非理性〉という捕らわれの身 плен собственного неразумия から解放される（自己を解放する）が、〈主体〉は固有の〈エレメント性と非媒介性〉（直接性） элементарность и непосредственность という捕らわれの身か

ら解放される（自己を解放する）。そして、主体が、自己を解放してから、それ(主体、自己)によって自己のものにされた内容 *усвоенное им содержание* を「放免」*«отпускать»*し、それ(その内容)に自己の古い形式を保持 *сохранить* することを許す（委ねる）*предоставлять* とき、こうした〈鷹揚（寛大）さ〉*щедрость* において、主体は、〈生粋（本当）の自由〉を發揮 *истинную свободу* проявлять する。精神は、自己の解放された客体 *вольноотпущенный объект* の側からの制限 *ограничение* に屈服 *поддаться* しなだけでなく、精神は、こうした自己の〈無制限性〉*неограничиваемость* あるいは〈無限性〉*бесконечность* について〈知っている〉*знать*、すなわち、過ぎ去った苦難と成立していた啓示との力 *сила* *минувшего страдания и состоявшегосякровения* を伴って、知っているのである。

【精神の生活活動 = 必然と一致する自由の創造：謙譲を通じての解放

жизнь духа = создание свободы, совпадающие с необходимостью : освобождение через смирение】

かくして、客体との闘争 *борьба с объектом* は、精神には、その解放 *освобождение* のために、不可欠であり、そして、このことの結果、他在を伴う主体の全過程 *весь процесс субъекта с инобытием* は、このことがフィヒテにおいてそうであったように、〈自由の実現の条件〉*условие осуществления свободы* である。事柄のこのような状態（状況）*положение дела* に際して、精神の生（生活活動）全体 *вся жизнь духа* は、必然性（不可避性）と一致する自由の創造 *создание свободы*、*совпадающие с необходимостью* であることが、あるいは自由に他ならない必然性 *необходимость*、*которая есть не что иное, как свобода* であることが、判明 *оказываться* する。〈他在との交際（関係）〉*общение с инобытием* は〈必然性〉であり、この必然性を、理念 *Идея* は、〈自由に〉独力で（対自的に）*для себя*、離脱（剥落）*отпадение* において、創造 *создать* していた。同時に、これ（他在との交際）は、制限されている精神の過程 *процесс ограниченного духа*、精神にとっては〈内的に必然

的な) 過程 *внутренне необходимый* (процесс) であり、そして、それゆえに、精神の〈自己定立(立法)性〉 *самозаконность* を、つまり、〈自由〉を、現象(発揮) *проявлять* させる過程である。〈客体の克服と剥奪(解除)〉 *преодоление и снятие объекта* は、自己を解放している、そして、最終的に、自己を解放した、精神 *освобождающий и, наконец, освободивший себя дух* にとっては、必然性(不可避性) *необходимость* である。同時に、このことは、精神の自己限定 *самоопределение* の、すなわち、精神のもっとも深い内的な必然性 *глубочайшая внутренняя необходимость* の、勝利 *торжество* である。〈客体の欠如〉 *неимение объекта* は、絶対的な自由の勝利と絶対的な必然性の確立 *утверждение* とを意味している *означать*。精神の生(生活活動)は、自由であればあるほど、それだけ精神の内的な本性 *внутренняя природа* にとって、より確実なもの *вернее* となり、その思弁的・有機的な生粋(本物)の必然性(不可避性)において、より偉大なるものとなる。〈非自由〉 *самая несвобода* そのものは、〈精神にとって、自由の実現 *реализации свободы* のために) 不可欠であり、そして、低次の段階での精神の課題は、自己の〈不可避的な被限定性と縮小されている自由〉 *необходимую ограниченность и умаленную свободу* を受け入れる *принять*、という点にある。というのは、このことを通じてのみ、精神は自己の〈必然的な無限性〉 *необходимая бесконечность* と縮小されていない〈絶対的な自由〉 *неумаленная, абсолютная свобода* とへ上昇 *подняться* しようからである。解放 *освобождение* は、精神が卑小なるもの *малое* から始めることを要求する。というのは、自由への道程は謙譲 *смирение* を通じてのみ導かれるからである。自己にその謙譲を課すことで、主体は、次のような確固不動の確信 *непоколебимую уверенность* を、保持 *хранить* しようし、しなければならない。すなわち、その謙譲を期待しているのは、客体に対する征服 *победа* のみならず、諸解放の中の最高のそれ、〈主体の被制限性の克服〉 *преодоление субъективной ограниченности* である、ということについての確信を。

【現実性の批判基準かつ客観的価値の尺度基準としての自由

свобода как критерий реальности и мерило объективного достоинства】

自由についてのヘーゲルの教説は、このようなものである。この教説に従えば、「自由」は〈現実性（実在性）の批判基準〉 *критерий реальности* であり、そして同時に、世界の全ての「現象」*»явление»*と「形象」*»образ»*にとっての〈客観的（客体的）価値の尺度基準〉 *мерило объективного достоинства* である、ということを確認 *установить* しうる。世界の形象が自由になればなるほど、その形象の地位は、精神的な生（生活活動）の上昇する系列において *в восходящем ряду духовной жизни*、それだけより高くなり、それは至高の水準の現実性（実在性）*реальность верховного уровня* に、それだけより近づく。

【最後まで対立関係に留まる非理性的エレメント（具体的・経験的なもの）

と自由（「概念」）＝「概念」とその限界との闘争の形而上学的「事実」：自己否定としての精神の生活活動：〈有限〉と〈無限〉、〈特殊〉と〈普遍〉、〈外部〉と〈内部〉、〈感覚〉と〈超感覚〉、〈偶然〉と〈必然〉、〈現象〉と〈本質〉、〈相對〉と〈絶対〉—〈前者〉の根拠としての〈後者〉—このことの自己発見＝自由の名における自己否定＝自己肯定

иррациональная стихия (конкретное-эмпирическое) и свобода (Понятие), которые остаются до конца в отношении противоположности = метафизический «факт» борьбы Понятия с его предел : жизнь духа как самоотличание : конечное и бесконечное, особое и всеобщее, внешнее и внутреннее, чувственное и сверхчувственное, случайное и необходимое, явление и сущность, относительное и абсолютное — последнее как основание первого — обнаружение этого = самоотличание во имя свободы】

ところが、世界の形象 *образ мира* がより自由になればなるほど、〈その形象が他在の形式に関与（関係）することは、それだけより少なくなる〉 *менее*

он причастен форме инобытия。自由は、なによりもまず、感覚的領域の征服 *преодоление чувственной стихии* の中に、〈具体的・経験的なもの〉に対する勝利 *победа над конкретным-эмпирическим* の中に、存する。このことは、次のことを意味する。すなわち、「概念」*Понятие* は、さしあたり *сначала*、〈具体的・経験的なもの〉の自存する律動 *самобытный ритм конкретного-эмпирического* に打ち勝たねばならない *должно побороть* が、しかし、その後で、その関与を打消し *погасить его участие*、「活動現実性」の圏域から離脱 *выйти из сферы «действительности»* しなければならない、ということ。非理性（非合理）的なエレメントと自由 *иррациональная стихия и свобода* は、最後まで対立関係の中に留まる *до конца в отношении противоположности остаться*。そして、このことの中に、〈具体的・経験的なもの〉に関するヘーゲルの最後の言葉 *последнее слово Гегеля* がある。世界と魂とのもっとも深い本質 *самая глубокая сущность мира и души* において、「概念」とその「限界」（*«Schranke»*）との闘争の形而上学的な「事実」*метафизический «факт»* борьбы *Понятия с его «пределом»* が表示されている *указаться*。この限界 *предел* は、まさしく克服 *преодоление* のために、「精神」によって創出される *создан* ¹²¹⁾ *Духом*。この制限は、精神の生（生活活動）が〈自己否定〉*самоотрицание* であるかぎりでのみ、「受け入れられる」*«приемлется»*。この自己否定の中に、精神の唯一の使命（目的）*единственное назначение* が、すなわち、自己の独自の現存（生存）を撤廃 *своё самобытное существование упразднить* し、「概念」の法則に従う *закону Понятия* *подчиниться* という——〈自由の名において自己を破棄する〉 *отменить себя во имя свободы* という——使命（目的）がある。有限なもの *конечное* は、自己において、「無限なもの」*«Бесконечно»* を自己の本質 *сущность* として発見 *обнаружить* し（探し出さ）なければならない。¹²²⁾ 「唯一の（個別的なもの）」*«единичное»* は、自己の使命（目的）を完遂することで *исполняя своё назначение*、自己を拒否 *отринуть себя* しなければならないし、自己の根拠

основаを「普遍的なもの」»Всеобщее»の中に見出обрестиされなければならない。¹²³⁾「外的なもの」»внешнее»は自己の生粋な（真実の）本性 природаを「内的なもの」»Внутреннее»の中に発見 найтиしなければならない。¹²⁴⁾「感覚的なもの」»чувственное»は、自己の背後から現出する「超感覚的なもの」выступающее из-за него »сверхчувственное»によって拒否 быть отвергнутоされなければならない。¹²⁵⁾「偶因的なもの」は、自己の「真実」に、絶対的な「必然性（不可避性）」に、変わらなければならない»случайном» надлежит превратиться в свою «истину»- в абсолютную «необходимость»。¹²⁶⁾〈具体的・経験的なもの〉の使命（召命）призвание конкретного-эмпирическогоは、次の点にある。すなわち、自己破滅の遭遇（邂逅）¹²⁷⁾へ自由の名において邁進する（急ぐ）спешить на встречу своей гибели во имя свободы、という点に。というのは、〈感覚的エレメントにおける否定的な過程は、神における肯定的、創造的な過程である〉негативный процесс в чувственной стихии есть позитивный, творческий процесс в Богеからである。世界における神の解放 освобождение Бога в миреは、次の点に存する。すなわち、神は次第に постепенно 具体的な経験の鱗 чешья конкретной эмпирииを投げ捨て сбрасывать、そして、最後には、それを全く「吸収」»абсорбировать»して、世界から絶対的な自由へと復帰 возвращатьсяする、という点に。経験的な現存態（実存）は、その上に神的な理性が礎にされる十字架 тот крест, на котором распят Божественный разумであり、そして、この十字架 крестからは、復活の一筋の道程 один путь воскресенияがあるにすぎない——思弁的な思惟 спекулятивная мысльにおいて。

【物質 → 魂 → 精神：客体の脱物質化 = 世界形象の解放過程

материя → душа → дух：дематериализация объекта = процесс освобождения образа мира】

こうしたことに従えば、世界の形象 образ мираが〈より自由であればあるだけ、その（世界の形象の）中には、「外的なもの」»внешнее»は、それ

だけ少なくなり、そして、それ（世界の形象）は、「純粹に内的な」*«чисто внутренний» элемент* エレメントに、それだけより近づく。解放の過程 процесс освобожденияにおいて、他在 инобытиеは、次第に、粗野で活気のない触知（感知）される物質の性格 характер грубой, инертной, осязаемой материиを失い утрачивать、そして、「感覺的〈感觸〉」*«чувственное ощущение»*、「感覺的〈情念〉」*«чувственную страсть»*、「感覺的〈形象〉」*чувственный образ*へと変化 превращатьсяする。客体は脱物質化 дематериализоватьсяし、魂へと移動 в душу передвигатьсяし、「魂的な本性」*«душевную (природу)»*を、しかし、その後、「精神的な本性」*«духовную природу»*を、獲得する。客体は、なお感覺的な事物に留まっただけでも оставаясь ещё чувственной вещью、条件次第で как бы、自己の発祥地を変え переменить свою родинуうるし、「精神から生まれたもの」に *«рожденным из духа»*なりうる。こうしたものは、〈芸術と宗教〉における事物的（物質的、形而下的）な存在 *вещественное бытие в искусстве и религии* である。そして、なにはともあれ、芸術と宗教の各々の形象は、それが、感覺的に内的な存在を、あるいは、それだけに、むしろ、感覺的に外的な存在を、必要としている в чувственно-внутреннем или тем более чувственно-внешнем бытии нуждатьсяかぎり、不完全 несовершененである。これは、何故にヘーゲルが、その空間的な凝固した塊^{かたまり}を伴う建築 архитектуру с её пространственными, застывшими массами を、芸術の中では〈最低のもの〉と見做し、その想像された精神的な状態^{テクスト}の織物を伴う詩作 поэзию с её тканью воображаемых духовных состояний を、〈最高の種類〉の美学的な創造性 эстетическое творчество と見なしているのか、その理由である。これは、何故にヘーゲルが、その渴望と予感 алкание и предчувствие を伴い、その情緒的な主観主義 эмоциональный субъективизм を伴う、宗教的信（信仰） религиозную веру を、經驗的な虜^{とりこ}（囚われの身）の変種 разновидность эмпиристического пленения と見做しているのか、その理由である。¹²⁹⁾

【「概念」の求心性と自己活動性の現存化：有機体の盲目的自己活動性～魂の意識と自己意識～理性的な認識と思弁的な自己認識

осуществление центростремительности и самодеятельности Понятия : слепая самодеятельность организма ~ сознание и самосознание душа ~ разумное познание и спекулятивное самопознание】

さらにいえば、世界の形象は〈より自由であればあるだけ、それだけより十全に「概念」*Понятие*の求心性*центростремительность*と自己活動性*самодеятельность*とを実現*осуществлять*する〉。自己への、そして自己へ向かう、単純な志向性*обращённость*でさえ、世界の全ての現象が近づきうるわけではない。自然的な有機体*естественный организм*は、〈自己活動性〉の、したがって、自由の、最初の現象*первое явление*である。これより低次のものは全て*всё, что ниже его*は、自由ではない。¹³⁰⁾ 真実の（生粋の）「反省（反照）」*истинная »рефлексия«*に近づきうる（が可能である）のは、「自己意識」と自己深化の端緒（起点）*начало «самосознания»* и самоуглубленияとしての、人間の魂*человеческая душа*だけである。真実（生粋）の〈自己活動性〉*истинная самодеятельность*（主体と客体の同一性*тождество субъекта и объекта*）は、思惟*мысль*においてのみ実現（現存化）される*осуществляться*。このことを念頭に置いて、ヘーゲルは、感覚的な形式において全ての内容*содержание*が開示*раскрыть*されうるわけではなく、¹³¹⁾ 真実の「より深遠なる」自然*более глубокая» природа истины*は、〈思惟活動の自由なエレメント*свободная стихия мышления*においてのみ〉表現されうる、と主張*на том настаивать*している。¹³²⁾ かくのごとくして、精神の解放は成就される*Так совершается освобождение духа*。有機体の聳的な自己感覚と盲目的な自己活動性とから*от глухого самочувствия и слепой самодеятельности* организма、魂の意識と自己意識へと*к сознанию и самосознанию души*、理性的な認識と思弁的な自己認識へと*к разумному познанию и спекулятивному самопознанию*。〈学問的な哲学は、最高の自由の実現であ

る) *Научная философия есть осуществление высшей свободы*.¹³³⁾

【唯一の必然性における唯一の自由

единственная свобода в единственной необходимости】

勿論、まさしく、哲学は、同時に、最高の〈有機的な必然性（不可避性）〉の実現 *осуществление высшей органической необходимости* である。世界の形象は、より自由であればあるほど、それだけより多く内的な有機的な必然性（不可避性）に浸透 *проникнуть* されている。偶然的なもの *случайное*、強いられているもの *насильственное*、任意的なもの *произвольное* は全て、次のことについて証言（証明）*свидетельствовать* している。すなわち、真実の（生粹の）自由は達成されないものに留まっていた、ということについて ¹³⁴⁾ том, что истинная свобода осталась недостигнутой。自己の生（生活活動）において恣意（専制、気まぐれ）*произвол* が創出（引き起こ）*творить* しているものは全て、強制に委ねられるか *насилию* поддаться、あるいは、諸々の偶然的な影響（作用）や声に対して応答（呼応）*отзываться* する。こうしたことは全て、疎遠な原理に囚われていて、いまだ〈唯一の自由〉*единственной свободой* を、〈唯一の必然性（不可避性）の中に〉*в единственной необходимости* 見出 *найти* していなかった。

【生活活動の自由 — 内的な自己限定の有機的な必然性：主観的合同、偶然的裁断、普遍性から挽き離された単一性（個別性）の自存性の排除；普遍的なもの、有機的融合、思弁的具体性の勝利

свобода жизни — органическое необходимость внутреннего самоопределения : исключение субъективной объединенности, случайного усмотрения, самобытности единичного оторвавшегося от Всеобщности ; торжество Всеобщего, органического сращения, спекулятивной конкретности】

生（生活活動）が自由であるのは、生（生活活動）が〈有機的に神のエレメントと合流（一体化）した（жизнь）*органически слилась с божественною*

стихию ときである。しかし、そのとき生（生活活動）が〈自由〉であるのは、自己の恣意的な選択の自由によって *свободою произвольного выбора* ではなく、むしろ〈内的な自己限定の必然性（不可避性）〉によって *необходимостью внутреннего самоопределения* である。自由は、主観的な合同（合併）*субъективную объединенность*、偶然的な裁断 *случайное усмотрение*、普遍性から挽ぎ離された個別的（単一的）なものの自存（自己存在）*самобытность единичного, оторвавшегося от Всеобщности*、これらを排除 *исключать* する。反対に、自由は、普遍的なものの、有機的な接合（融合）の、思弁的な具体性の、勝利 *торжество* 全般 *Всеобщего, органического сращения, спекулятивной конкретности* である。自由は、「個別性（単一性）」からの自己絶縁（放棄）を、要求している она требует от «единичности» самоотречения。

【自由の運命 = 喪失と再生：経験的な偶然性と必然性の網としての世界の諸現象：精神の悲劇（墮落と苦難）：精神の容器としての自然と（人間の）歴史 = 精神（と世界）の唯一の目的としての自由と、「諸国民の幸福、諸国家の智慧、諸個人の徳が犠牲に供される屠殺台」

судьба свободы = утрата и возрождени: явления мира как сеть эмпирической случайности и необходимости: трагедия духа (падение и мытарство): природа и история (человека) как сосуд Духа — свобода как единственная цель Духа (и мира), и «бойня, в которой «приносятся в жертву счастье народов, мудрость госдарств и добродетель личностей».】

こうしたことが自由であり、こうしたことが自由の運命 *судьба* である。自由の喪失 *утрата* と自由の再生 *возрождение* である。〈世界の諸形象〉の面前での「活動現実性」*«действительность»* 在 *в лице образов мира* は、自由を、より十全かつより完全に回復（復活）させる *восстанавливать*。しかし、それら（世界の諸形象）と並んで、経験的な偶然性 *случайность* と経験的な必然

性（不可避性）необходимостьの網 сеть を形成 слагать している「諸現象」
 »явления»は、そのままに留まっている оставаться。世界が存立している間、
 この世界の中には、解放されない、諸事物、諸現象、そして、諸状態が、存
 続 сохраняться している。そして、この世界には、〈精神の悲劇〉трагедия духа
 が存続している。精神は、いつまでも、次のような脅迫（威嚇）の下 под угрозой
 того に留まっている оставаться。すなわち、「理性化されなかった」世界の諸
 力«необразумившиеся» силы мира は、剥落（消滅）отпадать し、再起 восстанитъ
 し、そして、おそらく、精神を諸々の新たな墮落や苦難 падения и мытарства
 の中に誘い込む вовлечь ことになる、という脅迫（威嚇）の下に。なるほ
 ど、自由は、しかるべく（目的に適って）自己を創造する現実（実在）的な
 力 реальная, целесообразно творящая себя сила ではある。しかし、果たし
 て、自由には、相変わらずなお理性（透明）化 просветлить されていない、
 あくまでも感覚的な、エレメントが、対立していないであろうか？たしか
 に、人間の歴史は、内的な形象として внутренним образом、「精神」Дух と
 「理性」Разум で満ちている。¹³⁵⁾人間の歴史は、自然と並んで наряду с
 природою、精神の「容器」«сосуд» Духа である。¹³⁶⁾人間の歴史は、世界の過
 程 мировой процесс を、現存化され有機組織化された自由（の花冠）によっ
 て осуществленную и организованную свободою、飾り立てている венчать。
 というのは、自由の中には、「精神（と世界）の唯一の目的」«единственная
 цель духа» и мира が、あるからである。¹³⁷⁾けれども、やはり、歴史は、これ
 と並んで、「そこで諸国民の幸福 счастье народов、諸国家の智慧 мудрость
 государств、そして、諸個人の徳 добродетель личностей が犠牲 жертва に供
 される、大きな〈屠殺台〉«бойня»」¹³⁸⁾に留まっている。¹³⁹⁾

【叙事詩としてではなく悲劇として構成される世界における神の道程

путь Божий в мире, которая слагается не как драматическая поэма, но как трагедия】

世界の生（生活活動）は、二つの相互に排除するエレメンタルな諸力の結

合 совмещение двух взаимоисключающихся стихийных сил においてのみならず、自己を完全に絶対的な自由に還元することの不可能性 невозможность свести себя целиком к абсолютной свободе においてまた、流れすぎて（経過して）いる протекать。というのは、〈世界は生粋の思惟に残りなく変わりえない〉 *мир не может превратиться без остатка в чистую мысль* し、しかし、世界が思惟に変わるとすれば если бы он в неё превратился、世界は〈世界であることをやめるであろう〉 он перестал бы быть миром からである。絶対的な自由は、世界において再生 возрождаться するが、世界をそっくり吸収 поглощать してしまうわけではない。こうしたことは、世界における神の道程 путь Гожий в мире が、叙事詩 драматическая поэма においてではなく、これがヘーゲルに帰されることが稀ではないように、悲劇 трагедия において構成される（成立する）所以（理由）である。

【人間の魂、意思、具体的な習俗規範性の生活活動 = 自由の悲劇

жизнь человеческой души, воли и конкретной нравственности = трагедия свобода]

こうした「自由の悲劇」»трагедия свобода» は、人間の、魂、意思、そして、具体的な人倫（習俗規範）の、生（生活活動） *жизнь человеческой души, воли и конкретной нравственности* における以上に、より明確 яснее に現れる обнаруживаться ことはない。

原注

〔原注では頁ごとの脚注の形をとっているが、訳書では章ごとの通し番号にしている。〕

- 1) См. главу четвертую
- 2) Ср.: Lo. I. 148; Епс. III. 291
- 3) Ср.: Log. III. 318. См. главы четвертую, сельмую и восьмую
- 4) Ср.: Log. II. 243. См. главу восьмую
- 5) Diff. 221.

- 6) Diff. 221
- 7) W. Beh. 367
- 8) Phän. 442. Cp.: Enc. III. 427; Ph. G. 20. 21
- 9) ヘーゲル自身が自由のこのような解釈(説明) истолкование を与えている。; напр. : Enc. III. 374. 355. 292. (Z).
- 10) ヘーゲルによって極めて頻繁に慣用されるこの術語のこうした〈第一の〉意味 значение : »an sich (即自的に)は»на самом деле»(実際に),«в сущности»(本質において),«подлинно»(真実に)を意味する知っている。この意味はカント以来保持されていた。
- 11) 「精神の哲学」において、しかし、他の諸著作においても、時折、ヘーゲルは、これらの述語を、〈無差別に(混乱して)〉promiscue 使用していることが稀ではない。
- 12) この術語の〈第二の意味〉: »an sich»は、»непосредственно»(いきなり、直接的、無媒介的に),«неосознанно»(無意識に),«не раскрыто для познания»(認識に開示されていない)意味している。
- 13) この術語の〈第三の〉意味 : »an sich»は、»согласно очевидной для нас сущности вещей»(我々にとって歴然とした諸事物の本質に従って) или просто (あるいは、単に)«для нас»(我々にとって)を意味している。
- 14) См. Главы десятую и одиннадцатую.
- 15) Cp. : осуждение «Entsagung» и «Gewaltsamkeit» Enc. III. 231; cp.: 236 (Z). 237 (Z).
- 16) Enc. III. 236 (Z).
- 17) «Schranke». Enc. III. 150. 293 (Z).
- 18) “ringen”, “überwinden”. Enc. III. 293 (Z).
- 19) Cp.: о “sich einbilden” объекта. Enc. III. 230.
- 20) Enc. III. 230. 322 (Z).
- 21) См.: Enc. III 149. 199. 232.
- 22) Cp.: Enc. III. 24. 47. 231 234. (Z). 252 (Z). 273 249–295. 295 (Z). 371–372.
- 23) Enc. III. 150.
- 24) Enc. III. 149.
- 25) Cp.: “in Besitz haben”. Enc. III. 229.
- 26) “als Moment unterordnen”. Enc. III. 231.
- 27) “umgestalten”. Enc. 237 (Z). 248 (Z).
- 28) Cp.: Enc. III. 237 (Z).
- 29) Enc. III. 232.
- 30) “aufzhren”. Enc. III. 273.
- 31) “unterwerfen”. 231.
- 32) Cp.: Enc. III. 26 (Z). 61 (Z). 62 (Z). 288. 333. 350.
- 33) “gefügliches und geschicktes Werkzeug”. Enc. III. 237 (Z).
- 34) Enc. III. 232.
- 35) “durchgängig”. Enc. III. 232.
- 36) “flüssig”. Enc. III. 232.
- 37) “widerstandlos”. Enc. III. 232; “ungehindert”. Enc. III. 232.
- 38) “durchdrungen”. Enc. III. 232.
- 39) “richtig äussert”. Enc. III. 232.
- 40) “zu einer Unmittelbarkeit”. Enc. III. :233.
- 41) Cp.: Enc. III. 258. 294. (Z).

- 42) "Abhaltung gegen". Enc. III. 231.
- 43) "gleichgültig". Enc. III. 231.
- 44) "gebunden". Enc. III. 119 (Z.); "verwickelt". Enc. III. 231. 288.
- 45) "beschäftigt". Enc. III. 229. 230.
- 46) Enc. III. 229. 230.
- 47) Enc. III. 150. 239 (Z.).
- 48) Enc. III. 119 (Z.).
- 49) Ср.: Enc III 152.
- 50) Enc. III. 25 (Z.). 119 (Z.). 230. 297 (Z.). 367 (Z.).
- 51) Ср.: Enc. III. 117–118.
- 52) "Stärke". Enc. III. 231.
- 53) Ср.: Enc. III. 232.
- 54) Ср. III. 237 (Z.). 254. 285 (Z.). 292–293 (Z.). 296.
- 55) Ср.: Enc III. 237 (Z.).
- 56) Ср.: Enc. III. 254.
- 57) Ср.: Enc. III. 231. 237 (Z.). 239. 350. 373.
- 58) Ср.: Enc III. 327–328.
- 59) Enc. III. 149. 337. (Z.).
- 60) Enc. III. 119 (Z.).
- 61) "Sich auf sich selbst beziehen". Enc. III. 25 (Z.). 201 (Z.).
- 62) Enc. III. 305 (Z.). 350.
- 63) Ср.: Enc. III. 152.
- 64) Enc. III. 148 (Z.). 201 (Z.). 288.
- 65) Enc. III. 26 (Z.).
- 66) Ср., напр.: Enc. III. 314 (Z.).
- 67) Ср., напр.: Enc. III. 329.337 (Z.). 339.
- 68) Ср.: Enc III. 233. 246. 253. 254–255. 296. 339. 371.
- 69) Ср.: Enc III. 297 (Z.). 305 (Z.). 311. 322 (Z.). 346. 349 (Z.). 359–360 (Z.). и др.
- 70) «sich erfassen»: Enc. III. 69 (Z.). ; "sich in Besitz nehmen": Enc. III. 149.
- 71) Enc. III. 149.
- 72) Enc. III. 24.
- 73) "bei sich sein". Enc. III. 33. 232. 300 (Z.). 351.
- 74) Enc. III. 23 (Z.). 41. 69 (Z.). 234 (Z.). 236 (Z.). 291 (Z.). 296. 301. 373 и др.
- 75) Enc. III. 33.
- 76) Enc. III. 351.
- 77) См. Главу восьмую.
- 78) Ср. III. 119 (Z.). 295 (Z.). и др. См. главу восьмую.
- 79) Ср.: Enc. III. 201 (Z.).
- 80) Ср.: Enc. III. 237 (Z.). 251 (Z.). 295 (Z.).
- 81) "fertig geworden mit dem Inhalte" : Enc. III. 338 (Z.).
- 82) "durchgeführtes Aneignen": Enc. III. 350. Ср.: 239; "vollendete Besitznahme": Enc. III. 358.
- 83) Ср.: Enc. III. 295 (Z.). 311 (Z.).
- 84) "durchgebildet": Enc. III. 239.
- 85) "Diffenz": Enc. III. 230.
- 86) "Zeichen": Enc. III. 239. 240. 339.

- 87) "Abbild": Enc. III. 248 (Z.).
- 88) "tilgen"; cp.: Enc III. 339.
- 89) Cp.: Enc. III. 254.
- 90) Cp.: Enc. III. 292-293 (Z.).
- 91) Cp.: Enc. III. 296. 298 (Z.).
- 92) "gegenseitiges Sichdurchdringen der denkenden Subjektivität und der objektiven Vernunft" (思惟する主体性と客観的理性との相互的な自己貫通): Enc. III. 358 (Z.).
- 93) Cp.: Enc. III. 267 (Z.). Cp. эмѣ: «alles Fremdsein im Wissen aufgehoben» (全ての疎遠な存在 (他在) は知識活動において揚棄されている): Prop. 205.
- 94) "mich im Andern, als mich selbst wissen" (私自身を知ることとしての、他者たちにおいて私を知ること): Enc III. 275; cp. 284 (Z.).
- 95) Cp.: Enc III. 292 (Z.).
- 96) Cp.: Enc. III. 257 (Z.).
- 97) Cp.: Enc. III. 267 (Z.).
- 98) Enc. III. 370. 376.
- 99) Enc. III. 300 (Z.).
- 100) Cp.: Enc. III. 266.
- 101) Enc. III. 357 (Z.).
- 102) ibidem.
- 103) Cp.: Enc. III. 300 (Z.).
- 104) Cp.: III. 290 (Z.).
- 105) Enc. III. 291 (Z.).
- 106) Enc. III. 232.
- 107) "das ganz Freie" (完全に自由なるもの).
- 108) "heilig": Enc III. 292 (Z.).
- 109) Cp.: Enc III. 294. 295 (Z.). 296. 298 (Z.). 329. 339. 359 и др.
- 110) Enc. III. 374.
- 111) Cp.: Enc. III. 300 (Z.).
- 112) Enc. III. 375.
- 113) Enc. III. 375.
- 114) Cp.: Enc. I. 20. 44. Enc. III. 232. 377 и др.
- 115) Enc. III. 448.
- 116) Enc. III. 448. Курсив Гегеля..
- 117) Log. II. 182.
- 118) Enc. III. 428.
- 119) Log. II. 182. Это терминологическое органичение не мешает самому Гегелю настаивать на божественности «образов мира», на пантеизме и акосмизме. (この術語論的な有機体性は、ヘーゲル自身が、〈世界の諸形象〉の神性を、汎神論を、無宇宙論を主張することを妨げない。)
- 120) Briefe. II. 79.
- 121) «Die Schranke ist also nicht in Gott ind im Geiste, sondern sie wird vom Geiste nur gesetzt, um aufgehoben zu werden» (従って、制限は神の中にも精神の中にも存在しないのであり、制限は、揚棄されるためにのみ、定立されるのである。): Enc. III. 39 (Z.). 293 (Z.).
- 122) Cp.: Enc. III. 37. Beweise. 388. 389. 390. 431. 433. Beweise. B. 469.
- 123) См. Главу пятую.

- 124) Ср.: Log II. 230. Enc. II. 482-483. Enc. III. 18 (2). Bewise. 344 и др.
- 125) См. Главы первую, вторую, третью.
- 126) Ср. Log III. 241. Enc. III. 22 (Z). Bewise. 367. 429. 434. 437. 438.
- 127) «zu Grunde geht»: Bewise. 445; «Untergang»: Log. III. 241; “sich auflösen”: Bewise. 434; “vernichtet”: Glaub 67.
- 128) Ср.: “die Vernunft, als die Rose im Kreuze der Gegenwart”: (現在の十字架の中の薔薇としての理性) Recht 19.
- 129) Ср.: Nohl. 313. См. Главы третью и двенадцатую.
- 130) Ср.: Enc. II. 28 Recht. 87. Ph. G. 58; ср. С этим Diff. 265. 265-266, где природе приписывается свобода. (自由が自然に登録されている箇所) Это противоречие разъяснено в главе десятой. (この対立は10章で説明されている。)
- 131) Aesth. I. 14. 102.
- 132) Ср.: Enc III. 442. Aesth. I. 14 и др.
- 133) Ср.: Diff. 206 Glaub. 113. 157. Log. III. 318. Lat 315.
- 134) Ср., напр. : Enc. III. 407. Recht. 50 и др.
- 135) Ср.: Ph. G. 12. 13. 14. 16. 18. 21. 22. 29. 33. 51. 52. 73. и др.
- 136) Enc. III. 427.
- 137) Ср.: Recht. 172. Ph. G. 23. 23.
- 138) “Schlachtbank”. Ph. G. 25.
- 139) Ph. G. 25.